

---

# OUTLAW ALLIANCE

川和真之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

OUTLAW ALLIANCE

### 【Nコード】

N8072Z

### 【作者名】

川和真之

### 【あらすじ】

部活に所属していないいわゆる「帰宅部」である高山ら三人は、自分達の学外活動を認めさせるために、実力テストで高得点を目指す。しかし、通常通りに自習をしても、担任である酒井先生と約束した点数には到底届きそうにもない。そこで高山は、同じく部活に所属していないミステリある女子・青山先輩に近づこうと試みるが……。

流されない生き方を漠然と目指す生徒達を描いた、ほっこりする学

園ストーリーです。

In order to be irreplaceable  
one must always be different.

「かけがえのない人間となるためには、いつも他とは違っていなければならぬ」

(ココ・シャネル)

僕は肘をつきながら、左手でいつものようにシャープペンシルを回した。テーブルの上にある問題用紙には、堅苦しい明朝体のフォントで、「Nが自然数の時、次の式が成り立つことを数学的帰納法で証明せよ」と記してある。あたかも、それを証明すれば素晴らしい未来が待っていると言わんばかりに堂々と、だ。それが僕には許せない。同じ教育を受け、偏差値の高い大学を目指して、いわゆる「いい会社」に就職することを目指すことに、どれだけの意味があるというのだ。こんな問題より、もっと暴くべき、証明すべきことがあるはずだ。例えば、あの青山先輩には彼氏がいるのかどうか。よほど、こちらの問題の方が、高校生活における崇高な命題なのではないのか。

シャープペンシルの頭をたたき、僕は臨戦態勢に入る。どうせならこの問題を、恋愛的帰納法で証明してみせよう。「スポーツ万能でいわゆるイケメンの男は、憧れの先輩を彼女にすることが出来る」これが成り立つとして、N=1の時、そうだな、例として大塚にしよう。野球部の時期キャプテンである大塚は、憧れの青山先輩を彼女にすることが出来るか。ん、ちよつと待て。それは困る。そんなことされてたまるか！全世界の偉人が許したとしても、僕は決して許さないぞ！

バシつと音が聞こえた瞬間と同時に、僕の脳天に火花が散る。

「時間だぞ。ちゃんと真面目に解いてくれよ。今の状況を理解しているのかよ」

僕らのリーダー的存在である岡本の声は、怒り中に焦りも滲んでいた。ファミリーストランの大げさな窓から、あかね色に染まった夕暮れの日差しが射しこんでくる。秋が近づいた今では、放課後の時間になるとこの美しい光が街並みの全てを包み込む。

岡本は、3色ボールペンをつかみ直し、力強く赤色を選択して、実力テスト対策教材の答え合わせを始めた。季節は秋なのに、答案用紙には、まるで春の井の頭公園の桜のように×が咲き乱れた。岡本は、40点と僕の答案用紙に、必要以上に大きく書き込み、そして溜息をついた。隣に座る山中は、その答案用紙を見て微笑む。「お前も笑っている場合じゃないだろ！25点なんて論外だ！」

○

文武両道を掲げる厳格な進学校である我が北陵高校は、校長の想いもあり、異様ともいえる部活動・絶対主義が敷かれている。そして、驚くべきことだが、所属している部活動をまるで世間でいうところの肩書きとして見られるのだ。サッカー部はクラスを引っ張るヒーロー集団のイメージ。所属しているだけでステータスになる。仮入部の時点で選抜され、選ばれた生徒しか入部を許されない。華やかな女子部員のみで構成されるダンス部は、昨年初めて関東大会に出場し、学校内の勢力図を塗り替えようとしている。

マイナーであり少人数で構成される部活動も多い。5名以上の参加で、「部」の称号を与えられるが、そんな部活が十数種類ある。例にあげるとすれば、科学部、水泳部、茶道部などだ。オリエンテーション部、鉄道研究部、放送部あたりもそれに続く。

大所帯で結果を残し続ける主要部活動と比べると、辛酸を嘗める少人数部活動だが、彼ら以上に苦しい境遇に立たされている存在がある。それが各愛好会だ。有名なところだと、映画愛好会、少林寺

拳法愛好会あたりか。愛好会は、規定の人数を割り込んでしまつか、形に見える成果を年間通じて一つも残すことが出来なかった部活が、涙ながらに降格した姿である。愛好会からスタートすることは校則上認められていないため、例外はない。

そんな高校なので、毎年4月に繰り広げられる新入生争奪戦は、愛好会と部活の境界に立たされた生徒達にとつては、失敗の許されない過酷な戦いになるのだ。学園生活の実情を刷り込まれる新入生たちは、とりあえずなんでもいいから部活に入ってしまったおう、ということになる。愛好会のメンバーたちは、部活に所属する生徒の上から目線に、申し訳なさそうに学園生活を送るはめになる。

僕は部活にも愛好会にも所属していない。ここにいる岡本、山中もそうだ。じゃあどうして詳しいかって？部活事情に詳しいのは、リーダー岡本の志によるところが大きい。

「今回のテストは、俺たちの学園生活の未来がかかっているんだぞ。お前ら二人とも分かっているのか？」

「リーダー、相変わらず大げさですねえ」

身長も180センチと高くスマートな体型であり、整った二重が印象的な山中は、それなりの容姿なのだが、如何せん人見知りであり、そして帰宅部だ。クラスの人気者になる要素は残念ながら少ない。誰に対しても敬語を使うのは、尊敬の意を表しているかららしい。僕たちに対してではなく、誰にでも話すときは敬語であったという、彼の尊敬するミュージシャンに対して。

「しかし、これはチャンスでもある。全員で、平均点以上をクリアして、酒井に俺らの活動を部として認めさせようぜ。あ、すみません、ポテトフライ追加をお願いします」

岡本は今日3回目のポテトフライを頼んだ。

「酒井か……」

僕は酒井という言葉を発した後、あの口角を上げたニヤケ顔が頭に浮かびあがった。酒井とは、につき僕らの担任であり、生徒指導担当であり、そして数学教師でもある。

「やたら気合が入っているな。この会議に遅れてきた理由も、酒井関係？」

僕がそう聞くと、岡本は細い手首に力を通わせ、拳を強く握りしめた。

「そうだ！授業中に携帯電話を使用していたら、没収されたんだ。いまどきそんな理由で没収するかつての。俺の国が亡んだらどう責任とる気なんだ！」

俺の国とは、岡本が熱を上げているオンライン・ネットゲームのことだろう。

「いつものあれですよ。第4条3項。部活動の連絡、学校指定行事、ならびに家族間やり取り以外で携帯を使用した場合、没収されるって校則ですよ。」

山中はトーンの落ち着いた声で、取り出した生徒手帳を眺めながら、アナウンサーのようにスラスラと校則を読み上げた。僕たちの通う学校は、不当なほど校則が厳しい。しかも、全生徒を部活動に参加させるように作られた校則のため、これまた非常に分が悪い。

僕たちにとっては、我が校の校則は、日本が幕末に結んだ不平等条約のようなものだ。

「酒井には、今日もメタメタに言われたね。当然、来週の実力テストのことな。落ちこぼれは、努力しても落ちこぼれたとよ。普通生徒にそんなこと言うか？絶対あいつに約束を守らせようぜ」

クシャクシャの髪型に、レンズ入り9,800円で購入したと自慢する黒縁メガネ。岡本は、見た目はただのゲームオタクだが、権力に屈するのをひどく嫌う。そして、何やら熱いことを言う。僕は、そんな彼の一面をとても気に入っていた。

「でもさ、本当にそんな約束を酒井がしてくれたわけ？信じられないんだけど」

「本当だって！だから、絶対に今回高得点を取るべきなんだって！」僕は残りの冷めたポテトフライにバーベキューソースを絡ませ、口の中に放り投げた。岡本が言うには、来週の実力テストで僕たち

3人が平均点以上を獲得することが出来たなら、帰宅部を部として認定することを検討すると言うのだ。僕にはどうも騙されている気がしてならない。確かに、部活と認定されれば僕たちにとって大きな校則緩和になる。

「部室が出来るのは嬉しいですね。僕もギターが置いて便利です。わざわざ家に帰らなくてもライブハウスに行けるのはいいなあ」

「だろ？だろ？」と、岡本がはしゃぐ。山中は、地元のライブハウスでは、ちょっとした有名なミュージシャンだ。楽器を持つと、頼りない彼が影を潜める。MCもなんなくこなす。そんなことは当然、クラスメイトは知る由もない。

「酒井だつていきなし部活に昇格させることはしないだろうけど、少なくとも話は聞いてくれると思うんだよね。そしたら、毎週議論を重ねてきた部活創設会議が役に立ってことよ。だから、俺は今週相当勉強したよね。それこそ高校入試以来だよ」

「でもさ、だからといって話が都合よすぎない？そういうおいしい話には、たいてい裏があるっていうのが自然の摂理でしょ」

僕がそう言っていると、彼は少し眉毛をつりあげ、そしてかすかに微笑んだ。

「その通り！逆に俺たち3人が平均点以上取れなかったら、3人そろって退学にしてもいいぞって言ってきた。覚書も書いてきたぜ！」

「えー？そんなこと聞いてないですよリーダー！！」

店内に響き渡る大声に、ポテトフライを持ってきた店員が驚く。

「そりゃそうでしょ。今初めて言ったもの」

○

僕は中学生の時、陸上部の短距離選手だった。小学生の頃から足が速かった。リレーの選手にいつも選ばれ、周りから期待され、ちよつとした優越感を味わうことが出来た。全力疾走するときに味わう風、感性、高揚感。悪くなかった。夢など忘れて素直に陸上部に



入ればよかったと、今でも思うときがたまにある。例えば、今日のような日だ。

「何で二人とも落ち込んでるのよ。まず、目標を決めようぜ。山中、前回の実力テストの結果持ってきてくれたよな」

「その前に事情を詳しく説明してくれ！話はそこからだ」

「リーダーだって、酒井先生の話聞いたことありますよね？部活に入らないでアルバイトばっかしてた生徒を退学させた話。あれ本当って噂ですよ！」

僕と山中は、そろって反論する。岡本の絶対王政は、今に始まったことではないけれど。

「だってさ、昔からよく言うじゃない。背水の陣って言葉知ってるだろ。その昔中国のリーダーは、川を背にして戦わせただって兵たちは、一歩も引けない状態で、死にもの狂いで戦って、そのお蔭で戦に勝ったって話。やはりリーダーとしては、背水の陣で戦う姿勢を見せないと務まらないでしょ」

川を背にしていることを、さっきまで俺らは知らなかったぞ。知っていたら、昨日だってマンガなんか読まずに勉強したはずだ。まるで母親のように、最近やたらと勉強しろとうるさかったのはこのためか。きつと、腹が立って酒井に啖呵をきってしまったんだろう、と僕は想像する。言ってくればいいのに。岡本は、肝心なところで弱い心が出る。

「確かにさ、はっきり言っただけは反省する。でもさ、自分たちで作り上げる部活って最高じゃない？しかも、全く求められていない。現状はね。そんな中、帰宅部は設立される。当然、帰宅部なんてダサイネーミングにはしないよ。帰宅部（仮）ね。部活名は随時募集中だ！その新設される部活は、各々学外で活躍する奴らが集まるコミュニティにする。異文化コミュニケーションだ！お互い刺激を受けあうことの出来る、新しい空間にする。融合。コラボレーション。素敵じゃない？新しいイノベーションは起きる！必ずだ！そんな部活を立ち上げようぜ！この学校は、江戸中期の日本

か？鎖国している世界のようにじゃないか。今の時世、高校生からグローバル社会に打って出るべきでしょ！」

岡本は満足げに語り切った後、山中が持ってきた夏休み明け実力テストの結果に目を通す。わが高校では、テスト終了後、すぐに詳細な分析結果が出る。そして、数字で徹底的に評価される。いまだき珍しい学校だろう。

「確かにテストが難し過ぎるんだよね。だからさ、今回だってみんなの出来、そこまでよくないはずだ。平均点は前回も結構低い。学年全体平均点が、300点満点で138点。一科目45点くらいか。ラストトップの大塚は、197点で学年でもトップ。殿堂入りといわれる200点台に最も近づいた男だ。そして野球部時期キャプテンでイケメンだ。当然スポーツ万能で、悔しいぐらいにモテル。彼女は、美人マネージャーの、あの相坂先輩だ！」

僕の中で、恋愛的帰納法N＝1が成り立った。

「200点台と言ったら、青山先輩が去年取って以来、見ていない高得点ですよね」

青山先輩。山中の発言に、僕はひどく動揺した。そして、一瞬のうちに、僕の頭の中のスクリーンに彼女が鮮やかに映し出された。少し目にかかる前髪、自由闊達な黒髪お団子ヘア、そして透明な肌。華奢なイメージはなく、その立ち振る舞いは、ありふれた女子高生を感じさせない何かがあった。

「そう。青山先輩ね。あのミスティアス美女。そして、なんとって部活に所属していない！是非、俺たちが立ち上げる部の会長として迎え入れたい！あ、部長は俺ね」

「今は本題に戻しましょうよ。どうやってクラスの底辺である僕たちが、平均点以上をとるかですよ。まあ無理だと思えますけど……」  
「諦めたらそこで試合終了って、有名な監督さんが言ってたじゃないか！こないだの屈辱を忘れてはいけないぞ！あいつはどうしてあんなに狡猾、残忍、残虐な仕打ちをするのだ。僕らが何をしたいのだ！思い出すだけで顔が熱くなる」

仕打ち。確かにあれは、僕にとっても劣等感を味わうには文句なしの出来事であった。酒井はあろうことが、わざわざ所属部を添えて、夏休み明け実力テストの順位を廊下の掲示板に大きく張り出した。ビリが山中、ブービーが僕、そして下から三番目が岡本だ。つまり、下位3人に「帰宅部」という文字が並んだ。部活動は、表の右側にわざわざ酒井がマジックペンで追記した。これほどの辱めがあるものか。クラスメイトのささめく声が、僕の心に突き刺さった。とはいえ、勉強をしなかった自分自身に非があるのは明白なのだが。しかし、いいこともあった。通りかかった女子生徒が、何かを呟き、おもむろにその張り紙を破り捨てたのだ。廊下は一時騒然となった。しかし、彼女は何事もなかったように通り過ぎて行った。その女子生徒こそ、青山先輩だったのだ。

「青山先輩の評判、すこぶる悪いですけどね。僕はちょっと怖いなあ。母親は歌舞伎町の女王とか」

「盗賊団の一味って噂もあるよな。女盗賊か。かつこいいじゃん。俺はやっぱりお近づきになりたいけど」

「あまり悪く言つなよ。それも噂でしょ。根の葉もないことじゃん」  
僕は必至に擁護する。僕自身も、青山先輩のことはよく知らないのだけれど。

テーブルの上にある呼び鈴を鳴らして、僕たちは割り勘で会計をすませた。一人620円。安くはないが、やはりファミレスのフリードリンクは、僕たちの味方だと思う。普段は自分たちの活動に時間を使うが、金曜日の放課後だけはこうやってみんなで寄り道をする。いつの日からか、これは僕たちの日課になっていた。

○

外に出ると、あたりはすっかり暗くなっており、大通りを走る自動車のライトがひどく眩しく感じた。ファミレスの前に止めた自転車の鍵を、それぞれ学ランのポケットから探り当てる。

「よし！」

山中が突然大きな声をあげ、僕たちの方へ振り向いた。

「一発逆転、狙いませんか」

「なんだよそれ。カンニングでもするってこと？」

自転車にまたがった岡本が、怪訝な顔をする。

「テスト問題用紙を、事前に入手しましょう！」

「それは無理でしょ」

「いや、それが可能なんです。僕、ライブの都合上どうしようもない時はギターを学校に持参するんですけど、そうすると、第4条15項の学業、及び学内行事に係のない……という校則に引っかかるからよく職員室に行くんですけど、こないだ見つけちゃったんですよね。奥の入口から入って、右側の棚。ここには鍵がかかっているんですけど、これ、テストの保管場所なんですよ。その鍵は、酒井先生の引き出しの上から2段目に入っています」

「鍵の位置まで？なんでそんなことまで知ってるんだ？」

岡本は驚く。

「いや、酒井先生が教えてくれたんですよ。前回の実力テストで僕、ひどい点数取ったんですよ。一桁台だったかな？あれ、結構職員室でも問題になったらしくて。酒井先生の指導が悪いって、怒られたらしいんですよ」

「テストを盗んでも、高得点を取れてることか？」

「そうではなくて、テスト盗んでいるところがバレたら……」

「退学か」

「そうです。それを狙ったんじゃないかなと思うんです。だから、あえてそこに挑戦するのよくないですか！なんか、大人たちの思う通りにいかないぜってとこ、見せつけてやりたいんですよ。このままじゃリーダーはともかく、高山君と僕は平均点なんて絶対取れませんよ。今日は、実力テストに備えて部活動も休みのはずですし、今、午後6時です。この時間は、もうベテランの先生たちは帰って

いる時間ですよね。だから、節電で右側は電気が消えている可能性が高い。若手の先生たちの興味を、リーダーと高山君の2人で引いてください！そのうちに、僕がうまくテスト問題を見つけますから」  
山中は、カバンからシルバーの小さなデジタルカメラを取り出した。

そのカメラで、問題用紙を写真に撮るのか。しかし、どうやって若手先生の気を引くのか。そんなにうまくいくだろうか。大体、リスクが大き過ぎる。黙ってても退学するなら、やる価値ありだということだろうか。犯罪に走る人はこんな状況に置かれた人なのかもしれない。

「面白い案だとは思うけどさ。やるならもっと緻密な計画が必要なんだよな」

「でもですねリーダー、例えば真夜中に忍び込むとか、そういう誰もが想像する計画でやるよりは、僕は成功する可能性は高いと思うんですよ。相手が想定していない時にこそ、成功するものです」

「うーん」

中山が、音楽以外のことで意見をいうなんて珍しい。今回、よっぽど混乱しているのだろうか。音楽の方は順調と聞くが、うまくいかない勉強、うまくいかない学生生活という、避けられない日常に苛立ちが爆発しているのかもしれない。

他の先生に接触してみるの面白いかもしれないと、僕思った。テスト問題は教えてくれないにしても、何か協力してくれそうな気がしないでもない。

「作戦はうまくいなくても、何かテストのヒントが得られるかもしれない……」

僕は思わずつぶやいた。岡本は、僕の意図を理解したようだった。「よし、やってみるか！」

続けてリーダーが、威勢よく声を弾ませた。

○

自転車だと10分程度で、学校に戻ることが出来る。僕たちの高校は、丘の上にあり、最後の上り坂は忍耐坂と呼ばれるほどの傾斜がある。

ここまでして高得点を取る必要があるのか。僕の心の中がうごめく。ただ、僕たちの話を聞いてもらうにはいいかもしれない。部活に所属していない生徒だって、みんなそれぞれ活躍しているのだ。僕だって、おじさんのアトリエに通い、絵を描いている。クラスメイトに対しては、誰一人として語ったことはないが、将来の夢は画家だ。こないだ初めて自分の風景画が入賞した時、2人が自分のことのように喜んでくれた。それは、本当に嬉しかった。美術部に入らなかったことは、そんなに間違っていることなのだろうか。部活に入っていないだけでこんなに不便だなんて、なんだか可笑しい話だ。

「それぞれ学外で活躍する人達が集まる、切磋琢磨するコミュニティとして新しい部活を作りたい」という、岡本の部活創設の願いもよくわかる。ひよっとしたら、青山先輩だって入ってくれるかもしれない。最初は多少強引にでも、注目を浴びる作戦も必要かもしれない。時には、悪になるのも必要か。

僕は力強くペダルをこいだ。普段は、押して歩くこともある坂道を、今日は決して降りることなく上りきると決心した。どうやら、二人も同じ気持ちのようだ。汗が滴り落ちる。少しよろめきながらも、立ちこぎをして、なんとか盛り返す。

「ここで自転車から降りたら、負けだぞ」

岡本の張り上げる声が聞こえる。いいだろう。目一杯空気を吸込み、僕は身体の中にあるエンジンの回転数を上げた。足にエネルギーが伝わり力がみなぎる。僕は、前方に集中し、頭を左右にふり勢いをつけた。そしてようやく忍耐坂を上り切った。

その瞬間、想像していなかった情景が浮かび上がった。

節電無視の煌々と輝くライト、カーンと響く金属バットの音、声

を大きくあげるラグビー部の面々。校舎からは、勇ましいトランペットや、可愛いクラリネットの音が運動部を盛り上げるかのごとく響き渡っていた。遅れて到着した二人も、同様に立ち尽くした。僕たちの知らない学園生活が、こんな時間まで行われていることを、初めて知った瞬間であった。

「なんだか、俺らは学校の中心人物になれない理由を突きつけられた気分だ」

「本当、そうだね」

「そうそう。その通りだよ。お前らはクラスの吹き出物だ」

鼻にかかる声。僕らは振り返ると、口角を上げた憎らしい顔がそこにあつた。酒井だ。

「お前らこんな時間まで何やってるんだ？またいつもの定例会議か？そうやって無駄な話し合いをしている暇があつたら、少しは勉強したらどうなんだ。第一、放課後に制服姿で寄り道することは、部活動ミーティングと学校企画行事以外の内容では禁止されているはずだ。何度言つたらわかるんだ。第4条14項を今ここで読み上げてみる」

「なんで僕らは、放課後遊んで帰っちゃいけないんですか。意味がわからないですよ」

珍しく山中が声を荒げている。

「意味わかるだろ。部活動に参加しない奴らは、全てにおいて怠慢だ。いい例は、まさしくお前らズッコケ三人組だ。お前ら、一度でも学生生活で活躍したことあんのか」

「俺は学外で活躍しているんですよ。山中も高山もそうです。それに、勉強と部活は関係ないでしょ。第一、それを言うならば3年の青山先輩は帰宅部でも勉強出来るじゃないですか」

酒井先生の顔つきが変わった。どうやら、張り紙を破り去った犯人を知っているらしい。

「お前らが青山と繋がっているとは知らなかったがな。あいつだってクラスで全然友達がいなくて、恐れられているって話だ。放課後

いったい何をしているのか。なまじ勉強が出来るから文句は言えないが、風紀を乱している点ではお前らと一緒にだ」

「別に僕らは青山先輩のことは知りませんよ。しかも、きっとそんな噂通りの悪い人じゃないです。多分だけど……」

青山先輩を悪く言うことは、僕はなんだか許せなかった。捨て猫を拾って帰る姿を見たわけではない。噂は悪い話しか聞かない。でも、張り紙を破って通り過ぎた時の横顔。あの目。あれが、僕の脳裏から離れない。どこかさみしげだったのだ。

「どうしてだ？あいつはヤクザ風の男と街を歩いていたらって噂もあるんだぜ？校則違反のあの髪型だって、本当は指導したくてもバツクに何があるかわからんから、3年の教員達が注意出来ないって話だ。高校生は黙って部活と勉強を頑張っていればいいんだよ。とにかく文句があるなら、テストでいい点数を取ってから言え。はつきりしてることはな、お前たちの点数が悪いのは単なる怠慢ってことなんだよ。それが出来ないうちはワーワーわめくなや」

そう言い切ると、酒井は満足そうに自転車で坂を下って行った。

僕たちは、何も言い返せずにその場に立ち尽くしていた。すると、目の前を見慣れたクラスメイトが通りかかった。ユニホームを着たままの大塚だ。大塚の隣では、有名私立女子高の制服を着た可愛い女の子が腕を絡ませていた。

「お前、美人マネージャーの相坂先輩はどうした？」

岡本が冷静さを保ちつつ聞くと、大塚は苦笑いをして、人気のない公園の方に消えて行った。

しばらく無言が続いた。その均衡を破るように岡本が発言した。

「家帰って、死ぬ気で勉強しようぜ」

「そうですね」

山中は、観念したように頷いた。二人は、先ほど上ってきたばかりの忍耐坂の方向に身体を向きかえる。

「あ、ちょっと寄りたいたところがあるんだけどさ……」

僕がそう発言すると、岡本は信じられないと言わんばかりの顔を



した。

「おいおい。お前悔しくないのかよ？もう遊んでいる時間なんてないぞ」

「そうじゃなくて、テスト対策で一案があつてさ。うまくいったら、明日二人にも連絡するからさ」

二人は、不思議な顔をしながらも、必至に上ってきた坂を勢いよく下りて行った。

ポケットから、昨晚コピーしたお店の地図を取り出す。25時までの営業だから、一度家に帰ってから私服に着替えても余裕で間に合う。僕はしばらく時間を置いた後、彼らに負けなくらいの勢いをつけて坂を下り始めた。

○

僕は、一旦自宅に戻り、用意されていた夕ご飯「今日はあんかけ豆腐、秋刀魚の塩焼き、ご飯になめこの味噌汁だった」を食べた後、友達とテスト勉強をすると嘘を言つて、再び夜の街に繰り出した。

来週の実力テストで高得点を取らないと、何やら面倒なことになることはわかった。しかし、山中が代弁してくれたように、僕だつて、この土日でどうにかなるとは到底思えない。山中がテスト問題を手に入れようと言つたとき、それよりも安全かつ確実な方法として、実行に移すべき妙案が思いついていた。裏技ともいうべき方法だが、僕たちは活用出来ていない。そう、それは過去問題の活用である！

過去問の活用は、暗黙の了解ではあるが一応許されている方法であり、且つ有効なテスト対策だ。過去問を青山先輩から借りる。ついでに、お近づきになる。今まで不可能かと思われたこの作戦も、実は、糸口を先日見つけていたのだ。

先日、学校の帰り道に画材を購入しようと街を歩いていると、突如、僕の目の前に制服姿の青山先輩が現れた。本屋さんの自動ドア

が開き、そこから出てきたのだ。

その距離わずか2 m。ちょうど先輩のことを考えていたので、僕は途中から想像の世界に足を踏み入れたのではと錯覚したほどだった。僕は思わず足を止めてしまったが、先輩は僕のいた逆の方向へと足を進めた。僕の両足は、そこから本能のオートモードとなり、理性に反して彼女の進む方向へと動き出した。足は、震えていたような気がする。これほど心臓が揺れ動いた経験は、過去にもなかったはずだ。しばらく歩いていくと、彼女は路地裏の店に入っていた。僕は、何事もなかったように通り過ぎ、その店を後にした。

家に帰った後に店の名前をインターネットで検索してみると、そこは美味しいウイスキーが飲める古風なBARであり、そこで働く美しい女性の写真が載っていた。驚くべきことに、どこからみても麗しき青山先輩の横顔だった。

僕は、先輩がそのお店でアルバイトをしていると断定した。ちなみに、我が校ではアルバイトは特別な事情がない限り禁止であり、校則第7条2項にそのことが記載されている。そもそも、お酒の出る店で高校生が働くことは、倫理的に許されていない気がした。本当に普通のBARなのだろうか。外側からは、店の中を確認することはできなかった。しかし、大人のお店で働く先輩の姿を想像すると、僕の中の恋心は上昇する一方であった。

○

自転車を駅前の高架橋の下に止め、そこからBARまでは歩いた。わずか5分程度の距離だ。青山先輩を街で見かけてからというもの、僕は何度もお店の前を通り過ぎている。通り過ぎるだけで、店に入る勇気がどうしても足りなかった。今日はチャンス。目的は、あくまで過去問の入手だ。部活創設のための、友達の夢をアシストする活動。そう考えると少しだけ勇気が出てきた。

僕はお店の前に立ち、あと一步の勇気を振り絞る。さて、なんて

話しかけよう。どうしてこの店を知っているのか。当然、偶然を装うしかない。そもそも、高校生が入っていいお店なのか。いや、ダメだろう。となると設定は、大学生か。近くにある大学は桃山大学。「僕は、桃山大学の一年生です、実は、今、夜一人で洒落込んで夜を楽しめるBARを探しておりまして、店構えが、レトロでいいですね、前々から、気になって、いたんです」そんな会話はどうだろうか。よし、それでいこう。調べられることは、事前に調べてきたとはいえ、かなりの無計画且つ無鉄砲。先ほどの山中の問題用紙入手作戦と同レベルだなと、脳内の自分に叱咤激励されながら僕はその色褪せた扉を開いた。

足を一步踏み入れると、トランペットと弦ベースのアンサンブルが聴こえてきた。異空間へ誘う音楽に包まれた店内を見渡すと、世界各国のお酒と思われる空きビンがインテリアのように飾っており、少し照明は暗く、写真で見えるよりもさらに大人の魅力的にあふれていた。店内は、金曜日ではあるが、大繁盛とはいかないようだ。数名程度。多くても2人組であり、とても静かな雰囲気であった。

僕は、出迎えてくれた男性にカウンターへ通された。冷静な振りをして、席に座る。しばらくすると、水とメニューを持ってきてくれた。「初めてですか」と、透き通った優しい声で僕に語りかける。爽やかな笑顔が似合う、短髪の男の人。確かこの人はマスターだ。

青山先輩を探すと……、いた。カウンターの一番右側。僕と先輩の間には、空席が2つ。いつもと違い、髪をおろしていた。肩に優しくかかる綺麗な髪。学校でときどき見かける先輩より、大人の女性を感じずにはいられなかった。僕が見惚れていると、先輩は視線に気づいたのか座ったままでこちらを振り向き、少しはにかみながら会釈をした。学校にいるときは見たことがない表情だった。僕は慌てて会釈を返す。青山先輩の手元には、ロックグラスが置いてあった。そうか、今日働いているとは限らないじゃないか。なんたる初歩的ミス、しかし先輩がいたのはラッキーだった。

「あれ、三名様でしたか？」

「え？」

マスターの言葉に驚き後ろを振り返ると、ほくそ笑む見慣れた二人組がいた。やられた。後をつけてきたのか。しかも、彼らは学ランであった。せめて着替えてきてほしかった。制服姿は、あまりにも店の雰囲気になじまない。

「いやいや。知り合いではありませんよ」

焦りながら、僕はそう答えた。

「俺たちは二人です」

岡本も違和感なく自然に、とはとても言えない様子でそう答えた。岡本は、別れ際に僕の狙いを感じ取ったのだろうか。過去問の入手。これは、もともと僕たち三人では常々話題に上がっていた議題であり、入手した者の夕飯を盛大に奢るという、お小遣いの少ない僕達にとっては結構きついペナルティが待っている事柄であった。抜け駆けをしたのは、この理由も少しある。二人は僕と青山先輩の間に座り、右側の彼女にちらつと視線を向ける。やはり、先輩の存在には気づいているようだ。

「注文はどうされます？」

僕は、メニューをじつと眺める。見たこともないウイスキーの名前がずらつと並んでおり、目が回りそうになった。ページをめくっていくと、カクテルや世界各国のビールも揃えているようだ。

「ミックスジュースで」

作り笑みを浮かべ、僕はメニューにないミックスジュースを頼んだ。お酒なんぞ一度も飲んだことはない。ミックスジュースは、常連に対する裏メニューであり、にわか人気があるとの情報だ。このことは、ネットで調査済だ。

「俺はコロナビールで」

岡本は気にせず、ビールを頼んでいる。山中はギネスという黒ビールを頼んだ。

「あれ、裏メニューご存じだったんですか？」

嬉しそうな笑顔で、青山先輩が二人越しに語りかける。

「それ、私の考案なんですよ」

そういうと、先輩は席を立ち、従業員専用口からカウンターの奥へと進んでいった。マスターは、僕たちに青山先輩（鈴ちゃんと呼ばれているようだ）はこの店員であること、非番の時もよく手伝いに来ていること、創作料理を作り、そのメニューが評判で常連さんに人気があること、そして、お酒の飲めない女性客が来たときにも楽しめるように、ノンアルコールのドリンクを考案していることを教えてくれた。

それにしても、青山先輩の名前は鈴というのか。先輩は、少し化粧をしているようだった。小さな唇は、いつも以上に輝いている。

「3人とも高校生？」

カウンターから、ミックスジュースを出す青山先輩はそう尋ねてきた。隣でマスターがキリンのノンアルコールビールをあげる。さすがに学生服の人にお酒は出せないよねと、マスターは微笑む。ノンアルコールビールは、シャープな透明のグラスに、綺麗な泡を立てながら注がれていた。二人は、とても不満そうな顔をしている。そりゃそうだ。青山先輩だって高校生なのに、先輩が飲んでいたのは、どうみてもウイスキーのオンザロックだ。

「僕は北陵高校の2年生です」

作戦を変更して、本当のことを言った。しかし青山先輩は、ふーんといった後、結構近くの高校だねと答えただけだった。「同じ高校だね」というくだりから、テストの話をする案しか用意してこなかった僕は、これから一体どうすればいいのだ。ちらつと隣を見ると、岡本の顔が曇っているのが分かる。口の動きから、もつと工夫しろと言っているのが分かった。

岡本が食事のメニューはないのかと聞くと、マスターは「ここはお酒を楽しむお店だから」と、申し訳なさそうに告げた。近い将来、僕もこのようなお店でお酒をたしなむようになるのかと思うと、少し不思議な気持ちになった。「ちょっと待っててね」と、青山先輩は背伸びをしてカウンターに置いてあったロックグラスを取ると、ま

た厨房の中へと戻っていった。

「鈴ちゃんが何か作ってくれるみたいだよ。ただ彼女、キッチンドリッカーなんだよね」と、マスターは困った顔をしながら笑う。青山先輩は、僕たちのために料理を作ってくれるようだった。しばらくすると、美味しい香りを漂わせて、カキとほうれん草のパスタ、チーズのたつぷりのつたミックスピザ、そしてアボカドとサーモンのサラダを出してくれた。「さっきスーパーで買い物したんだよ。我が家では、私が料理係なんだよね」と、先輩は教えてくれた。今日は、一生の思い出に残る食事になるだろう。どうして夕飯を食べてきてしまったのだろうと、ひどく後悔した。

「これ、ひよつとしてソニー・クラークですか」

山中の発言に、青山先輩は少し驚いた表情を浮かべた。

「そうよ。今流れているこの曲ね。遊び心が音に乗っているところがとても気に入っているの。グリッサンドとか、リムショットとか、可愛いよね。メロディー・フォー・Cっていう曲なんだけど、知ってる？」

「知ってます」

山中は嬉しそうに微笑む。どうやら、店内に流れているジャズのことを言っているようだ。

「うちのオーナーがジャズ・ピアノが好きで。やっぱり、ビル・エヴァンスとソニー・クラークが多いかな」

「ビル・エヴァンス！僕、ワルツ・フォー・デビーを聴いて、すごい感銘を受けたんですよ」

山中の目が輝き、彼は自分が音楽をやっていることを告げた。

「全然ジャンルが違いますけど、僕はよくライブハウスで歌を歌っているんです。最初はギター一本で、初期のボブ・ディランみたいに歌詞をメロディに乗せて、声というか、言葉だけで聴かせたいなんていうこだわりというか、固定観念があっただんですけど、これを聴いてふっとびました。楽器も、歌、歌えるんですね」

「そうだね」と、先輩は優しく相槌をうつ。

音楽の話をする、止まらなくなるのは山中の悪い癖であり、最も魅力的なところだと僕は考えている。一つ、自分の信じる道のある山中の生き方を見ていると、僕はすごく誇らしい。少し危なっかしいところもあるけど、音楽をしているときの山中は無敵だと、みんなに教えてあげたいくらいだ。

「俺もジャズ、それなりに詳しいですよ。ジャズは全国共通語ですからね。知っておくと何かと便利なんですよ」

「何をするのに便利なの？」

青山先輩は、岡本の言葉に首を傾げる。

「国を治めるのに、ですよ。最近我が国も多国籍化してますから。英語より音楽です」

「あらそう」と、よく分からないといった表情で先輩は微笑む。その笑顔を見ると、僕はドキッとしてしまう。普段はきついイメージがあつたが、今日見せる表情は、ふんわりと柔らかいイメージだ。なんだかんだ僕自身も噂に引つ張られて、本当の青山先輩を掴むことが出来ていなかったのだろう。

「少し頂戴」と、先輩が小さい取り皿を僕に差し出した。従業員専用口から店内に戻ってきた先輩は、最初に座っていたカウンターの席に戻った。僕は、丁寧にパスタとサラダを盛り付け、それを先輩に渡した。ありがとうと言う先輩に、僕もつられて微笑んだ。

「お前も何かしゃべれよ」と、岡本が僕にけしかける。

「いい身体してますね」

僕は、思わず本音を口にした。

「何いってんだよ」

岡本が狼狽える。

「いや、そういう意味じゃなくてさ。いい体幹してるなって思っ普通で鍛えていたらつかない筋肉ですよ。でも、ガチガチに鍛えるスポーツというか、そういうのじゃない。柔軟性が必要なスポーツ、クラシックバレエとかですか？」

「おいしいな、ちょっと違うけど。よくわかったね」

「今はしてませんが、僕は中学の時、陸上部だったんで……」

男が絵を描くなんてと、バカにされた思い出が頭をよぎった。二人のように堂々と出来ない自分に、今更ながら嫌気がさす。

「私は演劇をしているのよ」

「へえ、じゃあ女優さんだ。見に行ってみたいです!」

僕は興奮した。

「お前はまだ高校生だろ?? 見に行くお金あるのか? 俺たち大学生には、大人の余裕があるがな」

そういえば、僕たちは別々の客としてお店に入ったことを思い出した。学ランを着ている大学生ということは、体育会応援団部という設定か。どこからみたら、岡本が応援団員に見えるというのだ。

青山先輩は、僕たちの会話を聞いて笑っていた。岡本は、さらに話を続ける。

「高校生時代っていったら、俺が一番あれがいやだったな。あの毎月定期的なやつてくる、あれ」

「あれですよね」と、山中も続く。

「テストのこと?」

青山先輩が答えた。いよいよ、テストの話題に持っていくことが出来た。なるほど。ここからが勝負か。

気合を入れるために席を座り直したところで、突然扉が大きな音を立てて開いた。木製の扉が、軋み悲鳴をあげる。何かと振り向くと、酔った大男が立っていた。店内を見渡した男は、ずけずけと店に入ってきた。背は190センチ近くあり、肌は黒く毛深い。まるでツキノワグマだ。あの太い腕で殴られたらひとたまりもないだろう。髪はかり上げられており、チョコレート色のサングラスをかけている。

「おいおい。今日は鈴ちゃんいないのかよ」

その声を聞き、青山先輩の表情は明らかに曇り、そして「また来たよ」と囁いた。男は荒々しく席に座り、遠くにいるマスターに向かって、ボルドーの赤ワインとチーズの盛り合わせを注文した。



しばらくすると、男は大きな声で電話をかけはじめた。せつかくのジャズが台無しだ。僕たちは、その会話にそろって聞き耳をたてた。何やら物騒な話をしている。裏切り者を殺すとか、殺し方はどうするかとか。とはいえ、やけにファンタジーだ。リペゴーレ産の偽物トリュフの大量生産は順調だ。トイカンヌの生ハム事件との兼ね合いもうまくいっている。政府には、国民の暴動をこれ以上堰き止めることは出来ないから俺らの勝利だ？なんだなんだ、こいつは何者なのだろうか。すると、岡村の口元が綻み、右手の親指をたてた。ああ、なるほど。

「フラシア王国のゴタゴタ話か。あんなの大した問題じゃない。犯人もおおよそ見当がついている。きっとその一味だな。国際条例に基づいて、俺が裁いてやる」

岡本はそういうと、熊さん退治は任せてくださいと先輩に宣言した。僕も手伝いますと山中。

「やつつけられるんだ」

青山先輩は嬉しそうだ。

「夜にサングラスをかけるやつなんかに、俺は負けませんよ」

しばらくすると、男はトイレに行くために席を立ち、その際に青山先輩を発見した。その瞬間、男の顔は野卑な表情に変わり、歩幅を大きくしてカウンターに近づいてきた。それと合図と言わんばかりに、岡本と山中は男の前に立ちはだかる。

「なんだお前ら？ちよつとそこを退け！」

「なんだ、だど。なんだとは笑わせてくれるぜ。まず、俺はお前に忠告しよう。非常に重要な指摘だ、よく聞け。今は夜の10時だぞ！太陽はとくに沈んでいる。俺様の眩しさに耐えきれず、そのサングラスをしているのならば許してやるが、とにかくお前、それ似合っていないぞ」

男の顔がますます濃くなり、赤く燃え上がっていくのが見て取るようにわかる。チョコレート色のサングラスが、今にも溶け出しそう。すると再び、扉の開く音が響き渡った。振り向くとそこには、

なんと酒井が立っていた。

「あ、お前ら制服姿で何やってんだ！」

片手には、封筒が握られていた。まさか、あれは来週のテストか？しかしこの状況、これは本当にまずい。幸い、僕たち3人はお酒を飲んでいない。でも、青山先輩はお酒を飲んでいる。飲酒がばれたら一発休学だ。酒井もどうやら酔っているようで、私服の僕と青山先輩には、気がついていないようだ。

「なんでこんなところで喧嘩してるんだよ。勉強しろって、帰り際も言ったじゃねーか。俺は、週末もお前らの未来を真剣に考えて、受験対策を兼ねるテスト問題を考えてやっているんだぜ。難問奇問の類を出されたいのか。この野郎、覚悟しておけよ」

「げ、酒井じゃん」

サングラスを外した男が、ひどく驚いた。円らな瞳をしていた。

「あ、お前国重じゃねーか！まだ夜もサングラスしてるのかよ。だから似合わないって昔から言ってるだろ。こいつも厄介な生徒だったんだよ。今、何やってるんだよ。どうぜまともな仕事についてないんだろ。お前は、卒業してからも校則守って生活しろってあれほと言ったじゃねーか。今ここで、校則全部読み上げる！」

「うるせえ！」

剛腕がうなる。国重は柔道部なのだろうか。やめろという酒井を無視して、担いでおもいきり投げ飛ばした。酒井はカウンターまで吹っ飛び、椅子が倒れる音が轟いた。スカツとした表情を浮かべてしまったのは、僕だけだろうか。しかし、僕と青山先輩の至近距離に飛んできた。まずい。このままではバレてしまう。

「青山先輩、逃げなきゃヤバイですよ。早く！」

「え？なんで私の名前を知ってるのよ」

僕はおもわず先輩の手を強く握りしめ、全速力で走り始めた。

○

無我夢中で走った。風を切る音が聞こえる。つま先まで神経を感じるイメージ。そして、腕の振り方は……、と意識したところで青山先輩の手を引っ張っていることを思い出した。「痛いって、痛いのバカ」と咎める声が聞こえ、僕は自動車のような急ブレーキをかけた。

青山先輩の手を放し、後ろを振り返った。左手には、まだぬくもりがまだ残っていた。僕との距離を少し残して、ひざに手を付き肩で息をしている。小刻み吐く息の音が、閑静な住宅街にひっそりと響き渡る。

「先輩、足、速いんですね」

僕が恐る恐るそう言っていると、青山先輩は僕の目をまっすぐに見つめてきた。

「逃げる必要あった？ スマートじゃないなあ」

その目は、少し困惑しているようだが、優しくかった。怒っていない。ふーと息をついて、僕は肩をなでおろした。

「しかし彼、いったい何者なんですか？ 全く青山先輩に結びつかないんですけど。何か狙われているとか」

「ああ、国重さんのこと？」

国重さん。まさか……、これが噂の人。確かに怖い感じだった。ヤクザというか、野性的な恐怖だったが。彼氏？ 僕の頭の中に、大きな鐘の音が鳴り響く。そんな馬鹿な。そんなことがあっていいのか。

「なんか勘違いしているようだけど、国重さん、うちのお母さんを付け回している困った人なんだよね。お母さんに近寄るな！ っていうたら、私のところに来ちゃって」

なんだ。彼氏じゃなくてよかった。しかし、国重さんはそれなりに若かった。青山先輩のお母さんは、きっと美人なんだろう。

「ところでさ、何か理由があって私に会いにきたんじゃないの？」  
あそこで働いていることを何故知っていたかについては聞かないであげると一言付けたし、先輩は僕の顔を見つめてきた。

はつとした。声が出ない。ようやく今の状況を身体が理解し始めたようだ。初めて青山先輩と話が出来ている。何度、このシーンを想像したことか。情けない。僕の身体は、また小刻みに震えているようだ。

「実は……、どうしても伝えたいことがありまして」

「何？」

もともとこの路地は人通りが少なく、あたりは月の光、オレンジに輝く外灯のネオン、そして道沿いに流れる川のせせらぎの音のみだ。あたりには誰もいなかった。二人が追いかけてくるにはまだ時間があるだろう。入学してからずっと懂れていて、もう、これ以上のチャンスはやってこないのではないか。青山先輩は、あと数ヶ月したら卒業してしまうのだ。しかし、僕の中で答えは出ていた。

「実力テストの過去問、貸してください！！」

僕は、深く頭を下げた。恥ずかしくて、青山先輩の目を見ることが出来なかった。しばらくしてから顔を上げると、あっけにとられた青山先輩の表情があった。そして、くすりと笑った。

「変な子」

ああ、終わった。僕は灰色に朽ちていった。まるで、矢吹ジョーのように。

「どの教科？」

「まあ、全部ですが、数学ですね」

「さっき二年生って言ってたよね？君の学年は、酒井先生よね。確かに、いやらしい問題を出すね。去年も監修してたはずだから、過去問やるのは有効かもね。でもさ、2年生の実力テストってこの時期じゃなかった？間に合うの？」

来週の月曜日であることを告げると、あきれて笑い飛ばされた。

「今から全力で頑張るんですよ！」と、僕は大きく宣言した。

「彼らにも渡すの？」

「当然です！」

「過去問なんて、部活の先輩にもらえばいいんじゃないの？」

僕は首を横にふる。

「それが、俺ら3人とも部活に入っていないですよ。俺たちについて心あたりありませんか？」

首を傾げた青山先輩だが、夏休み明け実力テストの際の、廊下に張り出された点数表の話をしたら、思い出してくれたようだった。

「あの時、僕のクラスの張り紙を破ってくれて、すごく感動しました。あの時なんて言ってたんですか？」

「もっと勉強しろよ、時間あるだろ。だったかな」

「あれー？みんなと一緒にじゃないですか」

僕は思わず微笑んだ。

「ていうかさ、それじゃ過去問あるだけじゃダメじゃない？」

「まあ、相当の努力と根性が試される週末になりそうです。憂鬱な週末の始まりです」

僕は笑いながらそう言った。

「こんなものありますけど」

青山先輩は、なんと酒井が持っていた封筒を手に入っていた。

「本当に盗賊の末裔だったんですか？」

「何の話？」

「それください！」

僕は懇願したが、ふふと微笑んだ先輩は、あろうことかその封筒を川に投げ捨てた。華麗に手裏剣のように飛んだあと、その封筒は川の流れにのってすぐに見えなくなつた。

「勉強も楽しいと思うんだけどな」

青山先輩の言う楽しさは、本来の勉強の楽しさであると言われる、知的探究心的楽しさのことなんだろう。僕はまだそれはつかむことは出来ない。それでも、今はとても愉快的気分になっていた。

「そうですね。こうやって仲間と一緒に敵に立ち向かう感じは好きです」

僕がひねくれた回答をすると、青山先輩は微笑んだ。

「じゃあさ、この土日私に私の家に来る？少しくらいなら家庭教師し

てあげるけど」

突然の青山先輩の提案に、僕は驚きのあまり空にも飛べる気分になった。

「本当ですか？」

「私の部屋でよければだけど。四人くらいなら入れるし」

「でも、岡本は物色癖がありますよ。女の子の部屋に入れるのは危険です」

「それはいやだな。リビングにしようかな」

青山先輩は本当に嫌そうな顔をしてみせた。来週のテストが楽しみになってきた。絶対に3人の中で一番いい点を取って、そしてお礼を言うのだ。

「で、君は何をやっているの？」

「え？」

「君も何かやってるんでしょ。そんな雰囲気あるよ」

おーいと大きな声で僕らを呼ぶ声が聞こえてきた。岡本たちだ！「後で教えてね」と一言そうつぶやくと、彼女は小さく手を上げ微笑んだ。僕は横に佇み、その女神の横顔にただただ見惚れていた。

○

惚れたのは失敗だったろうか。テスト中であることを思い出し、僕は必至に目の前の強敵に対峙した。耳を澄ますと、シャープペンシルの文字を走らせる音が聞こえてくる。気を抜くと、夢の世界へと飛び立ちそうな気分だ。眠い、とにかく眠すぎる！

土曜日のお昼、岡本は新部創設の夢を語り、そして今回の実力テストの意味合いを説明した。あれがよくなかった。いや、よかったのだろうか。「面白そう！」というと、先輩の目はガラスのように輝いた。この反応は期待はしていたものの、意外だった。学校に関心なんて全くないと思っていたのに。

それから僕たちは、先輩の用意した過去問を解き始め、文字通り

手も足も出ず、20分後、クッキーと紅茶を持ってリビングに戻ってきた先輩に「あれ？どうして解かないの？」と尋ねられ、「解かないのではなく、解けないのです」と白旗を振り、して稲妻が落ちた。

「世の中に熱意なくして達成された偉業はないのよ！本当に部活を作りたいのなら、これくらい努力と根性で乗り切りなさいよ！」

言い訳を重ねる僕たちへの先輩の台詞が、今も鮮明にのみがえる。特訓は、深夜まで、二日間に渡り繰り返された。陸上部の時、こうやって必至練習していたことを思い出した。今はどうなんだろう。何かにつけて、中途半端じゃないか。絵にちゃんと向き合っているのか。監視する人が誰もいなくて、甘えていないか。

僕は、朦朧としながらも、目の前にある数学的帰納法を説く。チャームとともに、テスト終了を知らせる酒井の声が響いた。

○

次の日朝、寝不足の身体を起こし慌てて登校すると、早くも昨日の実力テストの結果が廊下に張り出されていた。速報を出すのがわが高校の特徴だ。心臓を抑えながらクラスメイトの背中越しに覗き込むとするが、人が多過ぎて見る事が出来ない。僕は息を深くつき、目を閉じた。拳を握りしめ、そしてクラスメイトをかき分けて、力強く一番前に踏み出した。

いつもは足元付近に書かれた僕の名前は、自分の背の高さよりも上の位置に書かれていた。これは初めての経験だった。3人とも、平均点以上の点数だった。身体全体が高揚した。感激という言葉が頭に刻み込まれたのは、いつぶりだろう。

岡本と山中はどこだろう。早くこの感動を分かち合いたい。クラスメイトに聞くと、酒井に呼ばれて職員室に向かったらしかった。職員室に？本当に部活が出来るか。これはすごい。高揚感を全身にまとい、僕は職員室に一目散で向かった。

職員室に着きドアを開くと、想定していた状況とは180度異なる光景が飛び込んできた。酒井の厳しい顔、二人の沈んだ顔。その先には、悪名高い教頭先生が、腕を組みこちらを見下していた。

「君もこっちにこい！今回、君たち三人はテスト用紙を盗み、高得点を獲得したという噂が立っている。これは、事実なんだろう。君たちは芯から腐っているな。我が校の恥だ！」

「ふざけんなよ！どれだけ勉強したと思っているんだ！酒井てめえ」岡本の燃え上がる怒りが再燃する。

「しかし、盗んだのは事実だろう？それとも何か。他の人間が取ったのか」

「ぐっ……」

酒井はわかつているようだ。あの場に青山先輩がいたことを。僕は、こんなところで退学になるのか。せっかく、光が見えてきた学園生活をこの場で失うのだろうか。でも、それはいやだ。何か言わなくては。何でもいい。高校に入って、初めて必至に勉強した。楽しかった。その気持ちを伝えるだけでも、意味があるかもしれない。無駄でも構わない。抵抗をするんだ。

僕は言葉を発しようとした瞬間、酒井が一步前に出て、教頭先生の顔をまっすぐに見た。

「教頭先生。私は心願します。おっしゃる通り、こいつらは腐つてます。こんな状態で、社会に旅立たせたら、大変なことになります。私は、こんなところで責任を放棄したくない。生活指導としての誇りもあります。だから、もう一度私にチャンスをくれませんか？ひとまず、彼らの言う通り、テストを盗んでいないということを信じてみましょう。そして次回の実力テストで、今まで通り点数が悪かったら、今回こいつらはやはり盗んだと認めざるをえない。そうなったら、私の責任です。監督不行き届きです。私も併せて罰していただいて構わない。しかし、こいつらが次回も高得点をとれたら、それは更生したとして許してやるのも一興かと。これも、教育の一つです」



その場の空間が止まったように思えた。なんだ、酒井は僕たちを助けようとしているのか。

「彼らが盗んでいないとすると、酒井先生がテスト問題を紛失しただけであり、それが大きな問題だ」

教頭先生の怒りは一向に収まらない。なんだ、酒井も苦しい境遇に立たされていたのか。

「私は今、仮定の話をしているのですよ。仮定と事実を混在させずに、聞き分けていただきたいですな」

酒井は滔々とまくしたてた。責任の所在が、何処なのかはつきりしないようにするために、そして、判断は次回の実力テストの際にすべきと、誰もが頷かざるをえない状況にするために。

観念した様子の教頭先生は、不満そうに「ふむ」とつぶやき、その場を去って行った。酒井が、帰り際に言った。

「お前たち、どんな魔法を使っただ？テストは全て作り直した。お前たちの答案をみたよ。俺は感動したよ。勉強したんだな。なんだよ、やればできるじゃないか」

僕たちは、すぐにはその場から動くことが出来なかった。教室へ戻る帰り道、誰も多くを語らなかったが、なんともいえぬ充実感が僕たちを包み込んでいた。

○

「努力が実ってよかったわね！またみんなが遊びに来てくれて本当に嬉しいわ！鈴ちゃん、高校のお友達を連れてきたの初めてだったのよ。もう私感動しちゃって」

先輩のお母さんの声が弾む。「やめてよ」と、顔を桜色にして恥ずかしがる先輩は新鮮だった。先輩はこの週末、再び僕たちを家に招いてくれたのだ。

予想を裏切ることなく、先輩のお母さんは美人だった。先輩と同じく背は高く、目元はくつきりとしていて強い意思を感じる瞳をし

ている。明るい髪色と声はさらに若さを際立たしており、今日はこれから出掛けるのか、全身シャネルの洋服を身にまとっていた。「私はココ・シャネルのようになりたいの」と微笑む笑顔を見ていると、僕にはどうにも子供を持つ母親には見えなかった。

「よし、直訴しに行こうか」

「え？何を？」

先輩の提案に、僕は一瞬たじろいだ。

「何をつて……、何のためにテスト勉強を頑張ったと思っているのよ。結構近所なのよ。彼も、北陵高校の卒業生なんだから」

青山先輩の家から電車で2駅、そこから線路沿いに約10分歩くと、比較的新しい一軒家が立ち並んでいる。

「まさかこんなことになるとは」

岡本がつぶやく。

「何言ってるよ。岡本君の案じゃない。実行しなきゃ、それは全く意味がないのよ」

インターフォンを鳴らす音が響き渡る。同時に緊張が走る。先輩がインターフォン越しに会話をしている。奥さんだろうか。しばらくすると、玄関先で足音が聞こえた。

「新しい部活を作るには必要条件があるわ。それは、顧問よ。あなたたちうまくやるのよ」

表札にある酒井という文字を見ながら、僕は「悪くないな」と思った。悪くないって感想は、素直じゃないかもしれない。今僕が感じている喜びは、きっと他のクラスメイトが感じている喜びと同じなのだろう。今まで高校生活に飽き飽きしていて、このまま退学になってしまってもいいんじゃないかなんて、思ったことが嘘のようだった。

希望の香りがする。そして今、未来への扉が開いた。

（後書き）

川和真之第5作品目です。「勉強も本当は楽しいよね」というところから創作がスタートしました。楽しんでいただけたら幸いです。

なお、本作品は当初長編を予定して作成致しました。今後の展開を含めた長編バージョンを、近いうちに発表出来るようにしたいと思います。っております。

簡単なコメントでも頂けたら、川和の創作活動の一助となります。よろしくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8072z/>

---

OUTLAW ALLIANCE

2011年12月25日20時20分発行